

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02008

研究課題名（和文）グローバル化とインドの排外主義：インド北東部におけるムスリム排斥を事例に

研究課題名（英文）Globalization and Xenophobia in India: A Case-study of Muslims in Northeast India

研究代表者

木村 真希子 (Kimura, Makiko)

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：90468835

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アジアにおけるマイノリティへの排外主義の発生や展開の過程を明らかにするため、インド北東部におけるムスリムの排斥を事例として取り上げる。アッサム州に注目する理由は、人口の30%がムスリムであり、過去にもたびたびムスリムが移民排斥の標的となってきたためである。アッサム州では移民排斥をめくり、近年2つの大きな変化があった。1点目はヒन्दウ・ナショナリズムを標榜し、ムスリム排斥を声高に叫ぶインド人民党が2016年に政権党となったことである。2点目は2010年代後半に実施された全国登録簿(NRC)更新作業である。この2つの大きな変化に着目し、排外主義のあり方について分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

排外主義はグローバル化の進展と人の移動の増加につれて多くの国で問題となっているが、日本での従来の研究は北米やヨーロッパの事例や理論を参照してきた。しかしアジアでも移民やマイノリティの排斥は重要な社会問題となっている。インド・アッサム州の場合、植民地期の移民と分離独立によるヒन्दウ・ムスリムの間の分断という歴史的な経緯によって排除される他者が形作られているが、グローバル化の中での新たな変化も見受けられる。こうした事例を分析、比較することは重要である。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes the ostracization of Muslims of migrant origin in a state of Assam, India, as a case study of chauvinism and xenophobia in Asia. In Assam, Muslims constitute 30% of its population, which is comparatively higher than national average of 10%, and they became targets of anti-migration agitation several times in the past.

In recent years, there were two major changes regarding the situation in Assam. First, the Bhartiya Janata Party, a Hindu-nationalist political party which is hostile to Muslims became the ruling party in Assam. Second, the update of National Register of Citizens in order to verify the citizenship status in the state. Based on the analysis of the two major phenomenon, this study examines the changes in the anti-migrant movements in Assam.

研究分野：社会学

キーワード：南アジア インド アッサム 排外主義 ムスリム 移民 排斥 社会運動

1. 研究開始当初の背景

インド北東部アッサム州は植民地期の政策により移民が多く、特に隣接するバングラデシュからの不法移民に対する反感が強い。さらに2000年代よりヒンドゥー・ナショナリズムとムスリム排斥を全面に押し出すインド人民党が台頭し、アッサム州でも政権を握った。こうしたインド人民党による排外主義とムスリム排除の方針はアッサムにおける反移民運動にどのように影響を及ぼすのか、アジアにおける排外主義とムスリム排斥との比較を念頭に置きながら理解することに関心を持った。

2. 研究の目的

本研究では、近年のアッサム州における移民をめぐる2つの大きな変化を分析することを目指した。1つ目はインドの主要政党であり、ヒンドゥー・ナショナリズムとムスリムの排斥を掲げるインド人民党(BJP)の同州における台頭である。2016年の州議会選挙で連立政権を樹立し、2021年にも勝利して第二期に入った。2つ目は、2010年代後半に進行していた「全国市民登録簿(NRC)」の更新作業である。バングラデシュからの移民流入を取り締まるための手段として更新作業が進められたが、貧しい非識字層の排除と社会的な分断を招き、大きな影響を及ぼしている。この2つの大きな変化を分析することでインド北東部におけるムスリム排斥の形態を明らかにし、排外主義の特徴を明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

(1) 先行研究と政府/NGO報告書、新聞記事等の整理と検討

本研究では主に以下の4つのタイプの先行研究と資料を収集し、整理・検討を行った。1つ目はアッサム州におけるヒンドゥー至上主義台頭の要因と影響である。2016年のアッサム州議会選挙におけるBJPの勝利と組閣はアッサム州で初めてのことであり、政治学を中心に州内外の研究者がその要因と影響を分析した。これらの中では特に、BJPのヒンドゥー至上主義の主張がアッサムの文脈で受け入れられるよう、ムスリム移民の脅威と関連付けられた点に注目し、ヒンドゥー至上主義が北東部に進出したという点だけではなく、その内容を変質させつつ拡大していることに着目した。

2つ目はアッサム州における移民排斥の歴史、特に1964年の移民追い出しやこの頃に始まった外国人審判所の歴史と影響、さらに1993年の投票者名簿の精査による被害の歴史的経緯を追った。この点については政府報告書といくつかの先行研究により、特に1980年代の反移民運動前の動向を把握することができた。

3つ目は近年の被拘留者の状況に関する報告書や新聞報道の整理である。2000年代までは外国人と認定されたものはバングラデシュへ強制送還されたが、すぐに帰還することができた。しかし2000年代後半以降は強制送還が難しくなり、拘留所に收容されることになった。拘留所における非人道的な扱いや、外国人審判所における杜撰な審理過程が聞き取り調査の結果と合わせて明らかになった。

4つ目はNRCに関する世論の動向について、新聞やオンラインジャーナルの記事を整理した。これにより、2017年以降のNRCに関する世論の動向の変化と政治的な動きを通時的に把握した。また、特にムスリムへの影響に関して、Miya Poetryに関する論争を中心に、ムスリムの中で市民的な問題提起をしようとした動きとそれに対するバックラッシュを把握することができた。

(2) 現地調査

現地調査としては、主に3つのグループの人々にインタビューを実施した。まずは移民流入について問題提起を続け、NRC更新を要請した学生団体の中心人物に対してインタビューを実施し、1980年代からの流れと変化について重要な知見を得た。さらにムスリムを中心に、NRCの実施や移民排斥のムスリムへの影響について活動を続けるコミュニティ・リーダー、弁護士、本土の人権活動家へも継続的に聞き取りを行った。最後にムスリムの活動家や弁護士の助力を得て、元拘留者やNRCから排除された人々への聞き取りを実施した。コロナ禍の影響によって、2020年度から2021年度の間は現地調査を中断せざるを得なかったが、この間もオンラインでのインタビューデータの収集を継続し、2018年以降の傾向について継続的に把握することができた。

4. 研究成果

(1) アッサム州における外国人拘留問題とムスリム排除

全国市民登録簿(NRC)の更新過程で大きな影響があったことの一つに、いわゆる「外国人」の拘留問題があげられる。インドは1960年代から当時の東パキスタン(現バングラデシュ)からの移民流入が絶えないという訴えに応え、アッサム国境警察を外国人摘発の任務にあたらせ、また摘発された国籍を問われる人々の事件を扱うため、外国人審判所を設けた。さらに、1990年代、アッサムで反外国人運動の影響から選挙管理委員会が投票者名簿の中で市民権が疑われる人々を選定するよう通達を出し、およそ30万人の人々が「疑わしい(doubtful)」と認定され、これ

らの人々は D-voter と呼ばれた。

国境警察に疑いをかけられた人々も、選挙管理委員会に疑わしいと認定された D-voter も、外国人審判所に出頭しなければならない。外国人審判所はインドの市民権を証明する書類を審査するが、書類上のスペルの誤りや年齢の食い違いといったささいな瑕疵によって証明ができず、外国人と認定されるという指摘が表面化した。

さらに近年、懸念されていることは、外国人と宣告される人の数が増えていることである。1985 年から 2016 年までの 31 年間で外国人と判断された人々の数は 80,194 人だったが、2017 年 1 月から 11 月のわずか 11 か月間の間に 13,434 人が外国人と宣告された。この背景には、BJP を中心とするアッサム州政府がより多くの人を外国人と判断するよう、外国人審判所に圧力をかけているためであると指摘された。

こうした状況は、NRC によって外国人拘留問題に注目が向けられるようになり、表面化した。2018 年には全国人権委員会(NHRC)の特別監視委員がアッサム州の拘留所を訪問し、拘留所内の人権を無視した処遇について報告書を提出した。またその後アムネスティ・インターナショナルが同問題について報告書を公表した。さらに、NHRC に報告書を提出した特別任務官ハルシュ・マンデルは NHRC が何も対策を講じないことに抗議して辞任し、無期限で拘留することの正当性を問うて公益訴訟を起こした。公益訴訟の結果、拘留者は 3 年経過すると仮釈放されるようになり、彼らの口から実態が知られるようになった。

筆者は約 10 人の元拘留者に聞き取り調査を行い、多くがインド生まれの市民であるにも関わらず、名前や年齢の違いなど、ささいな書類の不備ミスで外国人と宣告されることが明らかになった。また、こうした裁判の費用は莫大なものであり、多くの場合家族は莫大な借金を負うことになる。

また、ムスリムの元拘留者が多いことは事実だが、ベンガル出自のムスリムのみには起きるわけではない。アッサム出自のムスリムであるデシ・ムスリムと呼ばれる人々や、コッチ・ラージボンシと呼ばれるトライブ出自の人々、さらには 1947 年後に国境を通過したベンガル系ヒンドゥーやガロ、ハジョンなどの難民の人々のコロニー居住者に多く疑いがかけられることも明らかになった。

(2)全国市民登録簿(NRC)更新作業の影響 貧困層の排除と社会的分断

全国市民登録簿(NRC)更新は 2009 年、アッサムのある NGO が外国人流入問題について政府は対策を取るべきであると公益訴訟を起こしたところから始まった。2013 年に最高裁は NRC 更新を命じ、州政府で予算や人員が確保された。NRC 更新作業とそれを取り巻く経緯を分析する際には、いくつかのアクターの役割をおさえることが重要である。

まず運動団体がある。AASU を中心に、大小の運動団体が NRC 更新の実施に向けて働きかけた。次に最高裁の役割は NRC 更新に際して決定的だった。アッサムの市民社会の中では法に則った裁定を歓迎する向きもあったが、今回の判断に関しては判事の一人がアッサム人であり、かつ最高裁は主にバングラデシュから外国人が多数入り込んでいるという前提のもとに NRC を進行したことは注意すべき点である。さらに、2016 年以降、アッサム州では BJP が州政権を担い、それまでとは異なるヒンドゥー・ナショナリズム的な排外主義を州内に持ち込んだ。

こうした状況の中、アッサム州において、NRC 更新作業は広範囲な賛成をもって迎えられた。運動団体は外国人流入問題に終止符が打たれることを期待した。一方、リベラル層は、最高裁の指示により、法に則った更新作業が実施されることが期待された。また、これまで迫害されることの多かった移民出自のムスリムは、自分たちの市民権が明らかになることを期待して歓迎した。ベンガル人多数のアッサム州南部のバラク平野において反対の声があがったほかは、おおむね賛意が広がったと言っていいだろう。

しかし、2018 年に最終名簿の前段階の名簿が公開され、誰が排除されるのかということが明らかになるにつれて、反発や失望が広がった。第二次名簿の際に主に問題となったのは貧困層の女性と子供が排除されていること、またすでに外国人の嫌疑をかけられているムスリムが排除されることなどである。こうした問題に対し、リベラル層やムスリムの一部から懸念の声があがった。

さらに 2019 年に最終名簿が公開され、申請者のうち名簿に掲載されなかった人数が 190 万人だということがわかると、それまで NRC に期待してきた運動団体が手のひらを返して批判し始めた。学生団体をはじめとする移民追い出しを主張する団体はアッサムにおよそ 400 万人の外国人がいるはずだと主張しており、最終名簿は欠陥があるとして再検討を要求した。一方、ヒンドゥー教徒の難民が多く名簿に掲載されなかったことに不満をもった BJP 政権は NRC のやり直しを主張した。NRC に対する人々の期待は大きかったが、最終的には多くの層に不満を残す結果となった。BJP 政権がやり直しを主張したこともあり、その後 NRC に掲載されなかった人々の処遇については作業が進まず、宙ぶらりんのままである。

さらに、更新作業の中で起きたさまざまな論争や排斥により、アッサム社会に大きな社会的亀裂を残した。特に、NRC で明るみに出たムスリムの排除に対して声をあげた層に対して、運動団体だけではなくそれまでリベラルとみられていた人々の一部が攻撃したことの影響は大きかった。アッサム州内におけるムスリムの状況に関して、インド国内外の関心は高まったものの、州内からのバックラッシュによりその後の目立った活動が困難な状況となった。

(3) インド人民党の台頭と排外主義

アッサム州では 2016 年の州議会選挙でインド人民党(BJP)を中心とする政党連合が勝利し、同州の歴史ではじめて BJP を中心とする政府が組閣された。BJP はヒンドゥー・ナショナリズムを掲げ、ムスリムを「侵略者」という脅威と位置付けて人々の不安や分断を煽り、票を獲得するという手法で勢力を伸ばしてきた。アッサム州では移民出自のムスリムへの反感は強いものの、ヒンドゥー・ムスリム対立が政治のアジェンダとして表面化したことはないため、BJP の手法が同州で通用するかが注目された。アッサムは州人口の 30% がムスリムであることも選挙での勝利の難しさにつながるのではないかと考えられた。

BJP の戦略は「土地のアッサム人」アイデンティティを全面に掲げ、ムスリムでも移民出自ではない、先住のアッサム人ムスリムの票を獲得することであった。従来、アッサムにおけるムスリムは主に移民出自であるとみなされ、土地のムスリムの人々は独自のプレゼンスを持たなかった。しかし BJP は 2016 年選挙の際にこの層に呼びかけ、一部のムスリム票の取り崩しに成功した。さらに 2021 年選挙の際には、「不法移民」と区別される先住ムスリムのための開発のために評議会を設け、10 億ルピーの予算を配分するという方針を示した。

2019 年、中央の連邦下院議会では市民権法が通過し、バングラデシュを含むいくつかの国からのヒンドゥー教徒を難民として受け入れる改正市民権法が成立した。この点に関しては従来のアッサムにおける「宗教にかかわらず不法移民を追い出す」という主張と対立したため反発を受け、大規模な市民権法改正反対運動が展開された。連立を組んでいたアッサム人民党は連立を離脱し、インド人民党の時期選挙での勝利は危ぶまれた。しかし 2021 年選挙で再び返り咲くと、インド人民党を含む政府はあからさまにムスリムを排除する政策を打ち出し、アッサム州における社会的分断は深刻なものとなっている。

(4) まとめ

アッサム州におけるムスリムの排斥は、同州における移民出自の住民の多さという特有の歴史と関係している。BJP の推進するヒンドゥー・ナショナリズムとは違いがあり、同党がアッサムで受け入れられるかどうかについては予想が分かれていたが、BJP はターゲットを移民出自のムスリムに絞り、政策や選挙戦略をローカル化することで州内の票を獲得した。特に移民出自のムスリムを標的にすると同時に、先住ムスリムを取り込んだことが特徴的である。こうした機会主義的な行動は社会の中で一定の勢力を脅威として票集めに成功するものの、人々の間に分断をもたらした。しかし一部のムスリムを取り込むことは、本土で強硬なムスリム排除を主張している BJP のアジェンダに変容を迫るものである。

このように、BJP の進出はアッサム州における移民/ムスリム排斥に新たな変化と対立軸をもたらしたが、同様に BJP のヒンドゥー至上主義の機会主義的な性質が明らかになるという側面ももたらした。本研究はコロナ禍により現地調査が遅れたこともあり、事例の把握が中心となったが、今後アジアの他の事例との比較の中でこうした特徴を位置づけていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木村真希子	4. 巻 106
2. 論文標題 インド・アッサム州における市民権問題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立教法学	6. 最初と最後の頁 59-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村真希子	4. 巻 53
2. 論文標題 インド・アッサム州における人の移動と人権保障 全国市民登録簿(NRC)更新問題を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 平和研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 3件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 木村真希子
2. 発表標題 2021年アッサム州議会選挙： ヒンドゥットヴァの勝利か、ヒンドゥットヴァの変質か？
3. 学会等名 「分権的発展の効果と潜在力：インド29州の比較分析を通じた民主主義的安定のかたち」科学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村真希子
2. 発表標題 ポドランド運動のもたらしたもの
3. 学会等名 龍谷大学現代インド研究センター総括シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kimura, Makiko
2. 発表標題 Hindutva Consolidation or Conversion?
3. 学会等名 The 13th INDAS South Asia International Conference: Populism, Diversity, and Enemies of the People: Politics and Society in South Asia in the Twenty First Century (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村真希子
2. 発表標題 シャレングラは日本兵と結婚したのか? インパール作戦をめぐる語りと記憶
3. 学会等名 「インパール作戦 現地被害・記憶・和解」連続オンラインセミナー 第2回 2021年2月22日 インパール作戦後の和解を考える会・明治学院大学国際平和研究所
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村真希子
2. 発表標題 アッサムにおける市民権法改正への反対運動
3. 学会等名 第8回FINDAS研究会 / 「南アジアの社会変動・運動における情動的契機」研究会 2021年2月18日
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kimura, Makiko
2. 発表標題 War, Gender and Chastity: Contested Narratives on Sarengla in the Naga hills of Manipur, Northeast India
3. 学会等名 第33回日本南アジア学会全国大会 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木村真希子
2. 発表標題 シャレングラは日本兵と結婚したのか? インド北東部ナガ丘陵におけるインパール作戦に関する語り
3. 学会等名 戦争社会学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木村真希子
2. 発表標題 インド北東部におけるインパール作戦をめぐる記憶 戦争とジェンダー、エージェンシー
3. 学会等名 大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター センター研究会議
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木村真希子
2. 発表標題 「性におおらかな社会」という神話? ナガ社会における婚前交渉と結婚
3. 学会等名 ゾミア科研第一回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kimura, Makiko
2. 発表標題 Who are the Citizens in Assam? --NRC Update in Assam, India--
3. 学会等名 11th session of the International Convention of Asia Scholars
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kimura, Makiko
2. 発表標題 Did Sarengla Marry a Japanese Soldier? Rethinking India-Japan relationship through World War II
3. 学会等名 Jawaharlal Nehru University, SCSNEIS, Monthly Seminar Series
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kimura, Makiko
2. 発表標題 Did Sarengla Marry a Japanese Soldier? --- War, Gender and Chastity in the Naga Hills, Manipur during World War II
3. 学会等名 Tata Institute of Social Sciences, Peace and Conflict Studies Programme Seminar
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木村真希子
2. 発表標題 独立インドと北東部、アッサム州
3. 学会等名 川崎市市民講座（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kimura, Makiko
2. 発表標題 War, Love and Chastity: Conflicting Narratives about a Local Female Interpreter in the Tangkhul Naga area of Manipur, India
3. 学会等名 6th Conference of the Asian Borderlands Research Network (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木村真希子
2. 発表標題 紛争地のフィールドワーク
3. 学会等名 津田塾大学国際関係学科50周年記念事業 多文化・国際協力学科設立記念 シンポジウム「女性フィールドワーカーは語る」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木村真希子
2. 発表標題 インド北東部におけるムスリムの排斥
3. 学会等名 東南アジア学会シンポジウム「境界からみるアジア ―宗教の中心と周縁」（北海道・東北地区 特別例会）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kimura, Makiko
2. 発表標題 Has Sarengla Married a Japanese Soldier? War, Gender and Chastity in Naga Hills, Manipur during World War II
3. 学会等名 India's North Eastern Region and Connectivity: Japan's Engagement in the Past, Present and Future (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 木村真希子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 慶応義塾大学出版会	5. 総ページ数 194
3. 書名 終わりのなき暴力とエスニック紛争 -インド北東部と国内避難民	

1. 著者名 Murayama, Mayumi, Hazarika, Sanjoy, Gill, Preeti, Kimura, Makiko et al.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 326
3. 書名 Northeast India and Japan: Engagement through Connectivity	

1. 著者名 田中雅一、石井美保、山本達也、木村真希子ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 456
3. 書名 インド・剥き出しの世界	

1. 著者名 Tatsuya, Yamamoto, Tomoaki, Ueda, Kenta, Funahashi, Kazuhiro, Itakura, Shinya, Ishizaka, Makiko, Kimura, Maya, Suzuki, Kodai, Konishi	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Palgrave	5. 総ページ数 222
3. 書名 Law and Democracy in Contemporary India: Constitution, Contact Zone, and Performing Rights	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------